

聞くままに また心なき身にしあれば おのれなりけり 軒の玉水

雨の季節となりました。雨が降れば服は濡れるし、洗濯物は乾かないし、じめじめとした嫌な季節になったと思われる方も多いでしょう。しかし、米を育てる農家にとっては待ち望んだ季節の到来、といったところでしょう。

さて、道元弾師は冒頭のような雨にちなんだ歌を残しておられます。

あなたは、軒の玉水の落ちる音をどのようにお聞きになるのでしょうか。

うっとしいとか、早く雨が上がってほしいとか思いながら、雨音を聞かれるのでしょうか。それとも、農家の方のように喜ばしいものとお聞きになるのでしょうか。

ここで道元禅師の詠われる「聞くままに また心なき身にしあれば」とは、何の雑念も好悪の判断もなく、無心のままに「ただ聞く」、ということですね。そして、そうすることで自身の価値観や自分のものさしを離れることができ、「おのれなりけり 軒の玉水」という、自己と見る対象が一体となった世界があらわれて来るのです。

つまり道元禅師は、軒の玉水が自分自身であると詠っておられます。

「ポトリ」「ポトリ」と「私」自身が落ちていきます、と言っておられるのです。

このようにみると、禅師のこの歌は次のような言い換えも可能なのだと思います。

掃くままに また心なき身にしあれば おのれなりけり 寺の竹箒

どうぞ ———— の中に、自分自身の身近な風景を適当な言葉を使って自由に入れてみてください。

そこに現れる、風景や行為と自分が一体となったようす、それが悟りの世界である、とお示しになっているのではないのでしょうか。

実は、今この文章を書いている時、窓の外を、つばめがすいすいと飛んでいます。

見るままに また心なき身にしあれば おのれなりけり 空いくつばめ

願わくは、今この時を「スーイ」「スーイ」と、一如の世界として生きていくことができるときならば、と思います。

そのように、無心の世界に生きたいものです。

道元禅師は、仏法を説くために『正法眼蔵』等の著述を残されたのみならず、和歌の形で様々な教えも示しています。それらは、「傘松道詠」という名で広く知られています。それらの歌の中には、自然と人間が一体となった心情がたくみに表現されたものが少なくありません。そこには、禅師の独特な世界観が現れているのです。

今回取り上げた歌は、中国唐代の禅僧、鏡清とその弟子の間答を踏まえています。鏡清は僧に質問しました、「外の音は何だ?」。僧は答えました、「雨垂れの音です」。鏡清は僧にいいました、「お前は、自分を見失つてものにとらわれているぞ」。鏡清は、何を言いたかったのでしょうか。その答が、禅師の歌の中にあるのではないのでしょうか。

聞くまゝに
また心なき
身にしあれば
おのれなりけり
軒の玉水

道元禅師

曹洞宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部